

# 三河 アララギ

平成二十三年

十月号

第五十八卷 第十号



ニューヨーク日記(60) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

June 5, 2011 : Veuve Clicquot Polo Classic

## Blue Shoe Diaries



ポロの試合見てきました! ヴーヴクリコのポロクラシック。アルゼンチンの人気プレーヤーナチョフィゲレスも参加! ポロ会場では美味しい出店が沢山。特別にこのイベントのために作られたシャンパン入りのグルメピクニックバスケットもあったのでちゃっかりオーダーしておきました。ちょっとかっこいいバスケットでしょ? キャビアも入っていたよ! 人が沢山で試合の方はあまり見えなかったけどピクニック楽しかった~今度は試合もみたいな。。

We went to the Veuve Clicquot Polo Classic! Famous Argentine player, Nacho Figueras played (and his team of course won). Lots of yummy food stands where there that it was such a foodie event. We, of course, had to get the luxe picnic basket. It came in a stylish basket that had champagne and caviar and more! The event was quite crowded that I hardly got to see the tournament but really had fun with the picnic. I'd want to see a polo match though. Is there one I can go to?

# 目次

## 第五十八卷第十号(通卷六九四号)

表紙 大根

ニューヨーク日記(60)

今泉 由利 (1)

感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」

Blue Shoe (2)

歌集・一本の木

杉浦 弘 (4)

水影

岡本八千代 (5)

揚羽

白井 久吉 (6)

地球なる

今泉 由利 (7)

オクラの花

伊藤八重子 (8)

花に宿り

弓谷 久子 (9)

河原撫子

青木 玉枝 (10)

日照雨

内藤 志げ (11)

ラディッシュ

安藤 和代 (12)

夏の花

林 伊佐子 (13)

手術

清澤 範子 (14)

ブルーベリージャム

金津 文枝 (15)

母子草

半田うめ子 (16)

真夏日

近藤 映子 (17)

初夏

伊与田広子 (18)

窓開け放ち

胃甲 節子 (19)

御在所岳

杉浦恵美子 (20)

慣なふ

北川 宏廸 (21)

御霊

堀川 勝子 (22)

チンチロリン

平松 裕子 (23)

夏草の

山口千恵子 (24)

千尋

再々々の子規庵

大柳

猛暑日

楮しほ船ね

「ことよせ」

現代学生百人一首

「俳句」

私の一首

贈呈誌 八月号

絹の話(10)

物理学者と詩歌の世界(21)

「斎藤茂吉と御津磯夫 一」

和歌から派生した季語の本意(その十五)

「氷魚」のことから(129)

ことのはスケッチ(394)

和菓子街道(60)

お知らせ・編集後記・三河アララギ規定

小野可南子 (26)

夏目 勝弘 (27)

秋山 逸穂 (28)

伊藤 忠男 (28)

白井 信昭 (28)

いーはとぶ (29)

東洋大学 (29)

植村 公女 (30)

一石 (30)

喜仙 (31)

皓一 (31)

内藤 志げ (32)

林 伊佐子 (32)

山口千恵子 (32)

今泉 雅勝 (33)

今泉 雅勝 (34)

鮫島 一石 (36)

鮫島 満 (38)

佐藤 喜仙 (40)

岡本八千代 (41)

今泉 由利 (42)

平松 温子 (43)

山口千恵子 (25)

## 感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より

形容の何にも見えぬ石ひとつ流るる秋の水より拾ふ

P  
178

花のこる千振ひともと拾ひもちて山ゆく路に妻のとふこゑ

P  
178



歌集 「一本の木」

杉浦 弘

朽木より飛び立つ羽蟻限りなし翅きらきらと耀かせつつ

記憶力最も鈍きわれにしてあの瞬間のことは忘れず

瑕つけて水に浸して蒔きたりし夕顔の種ひとつ芽生えず

## 水影

蒲郡 岡本八千代

水甕の水影ゆれつつけふの空歎きぬしこともまたなんのその  
もらひ来てメダカ六つ七つ放ちたり忽ちゆるる甕の水影

けふよりはわが水がめにメダカがゐる一つ一つのいのち素早し

いのちあるものが動けり庭の甕ある時はそれを忘れ呆けつつ

水面みおもふかく映れるネムの白き幹やはりゆれをり今日の水影

ちぎれ雲ちぎれちぎれていつまでも付きてくると名古屋へのわれに

五十九回形象派展を觀にゆかむ夫の画題の「わかい芽にて」を

突然に逝きにし人のまた浮かぶさるすべり咲く花くれなゐに

夫と吾の父母ちちはは四人のご精靈あか歸りたまふやこの燈りみち

面影は遠くなりつつアトリエの君の梅檀つばちの青き円実

## 揚羽

新城 白井久吉

庭隅のスタチの中に育ちしか珍らしき揚羽高く低く舞ふ

幼児おぎなごの「セミおこが怒おこつてゐる」といふことばはいつの間に覚えしか

かつてわれの贈りしキツネノカミソリの写真なりとの添へがきのあり

学校の夏の休みの終るころ色づき初むる地柿一本

対岸の稲木の地区に明日の朝農薬空中撒するとぞ

ゴマの葉をまたたくうちに食ひあらず指ほどもある虫の名知らず

入浴もひとりで出来るとは言へど転ばぬやうに滑らぬやうに

新聞を見てゐるわれの手をとりて二歳児は言ふ「おやつに行こう」

眼の前に郵便ポスト見えをれど杖曳きてなほ休み休み行く

地下足袋を履く日はあれどおほかたは運動のためと畑の見廻り

## 地球なる

東京 今 泉 由 利

地球なる一万二千メートル上空を一万キロほどとびゆかむ旅  
飛行機の小さき窓の暗闇に星一つあり連れ添ひてゆく

無限かとマンハッタンの窓々に朝の陽きたり無限のほどに

青空に描きしビルの風景に描き足してみる夜のオリオン

急階段一段一段降りる地下ニューヨークのアートに紛る

白い紙6B鉛筆それだけにアートとなせむ人の姿を

深深と緑の深しセントラルパーク木漏るる雷鳴木漏るる雷光

日常を大きく隔ち美しいエンパイア・ステートビルの見ゆる窓

放射能をつくりいだせり人類は放射能を無くすを知らず

恐竜が滅びしやふに人類も亡びかゆかむ人工放射能

## オクラの花

豊川 伊藤八重子

麦飯にとろろ汁付く昼ご飯懐しく食べぬ「おとわの杜」に

今日の日はなん月なん日なん曜日これより始まるわがデイケア

庭前に緑のカーテンなすゴーヤ青き果二つ娘の手より受く

図書館よりお下りの本を貰ひ受け娘は勤しみし職を離れぬ

なすべき事数多残れどなし終へず唯生きゐる吾れとなりける

耳に手をかざす仕草のかなしさも身に付きにけり夫より老いて

大粒の雨に紫蘇の葉揺れ返る今朝はや秋立つ犬山の家

花水木の木の天辺に花二つ咲かす南瓜の蔓先見えず

挽ぎたての青きオクラをさつと茹で好みに食めり子の家の朝

淡黄色の花弁の底は濃紫オクラの花は清新にして

## 花に宿り

豊川 弓 谷 久 子

異常無し検査結果なり医院を出ればまばゆきばかりの日の光

露営の歌一ふしそつと口ずさむ敗戦の日の我が鎮魂歌

戦争はつくづくいやだと思ひたる我が十八歳の夏暑かりき

ギーツと長くチョンと短かし馬追ひの姿は見えず草の畑に

庭に咲く高砂百合を白菊に添へて供ふる夫の墓前に

迎え火も送り火も無くひっそりと今年の我の盆も過ぎゆく

新撰組のあと追ひかけしとみさとより壬生菜飴玉屯所大福

そら豆に似たる小蛙高砂百合の花に宿りて今朝も動かず

猛暑に続くゲリラ豪雨か台風は南の海にまた二つあり

思ひ患ふ事の無ければ暑さのみかこちかこちてひと日暮れゆく



## 河原撫子

伊丹 青木 玉枝

ベランダに桔梗の花のあざらけく心ばかりの秋となりたり

川原を少しづつ足伸ばしゆく足音に河原撫子の一群ゆるる

六帖のわが城にゐて日日暮らすテレビは世界のニュースを運ぶ

わが息子団魂という重荷よりようやく解かれ安らぎの日び

姉もまたいたく老いたりはるばると伊丹に尋ね来背の丸き姿

拭いても曇の消えぬわが眼鏡いよいよ白内障の手術近し

夫と共に生きしあかしぞ鰻屋の一番多忙な土用丑の日

連れ立ちて旅せし事も少なかり夫の墓参に一人旅つづく

夫と共に三十八年の豊かさに朝夕心経手の数珠を見る

千葉に住む子に送るシップ菓熱中予防の塩飴入れて

## 日照雨

豊川 内藤 志げ

ワイパーを強にまわして目を凝らす行き交ふ車の無きを願ひつ  
夕立ちの日照雨の後の静もりに椿の緑暑く照りゐる  
夕立の去りにし庭のコンクリート微かに湯気の立ちてゐにけり  
夕風の涼しき中に草を取る夕餉に遅れ叱られてをり  
曇り日に草取り進み夕餉どき体内時計は大きく遅れる  
家敷畑道行く童子呼び止めて茄子と胡瓜を手提に詰めやる  
蠟梅に絡みて下る形よきジャンボ南瓜は黄に立ちをり  
天井に行き詰りたる糸瓜の蔓ゆらりゆらゆら巻蔓垂す  
びっしりとゴーヤ糸瓜は入り乱れ葱を束ぬる手許の暗し  
目を凝らし指につけたる六神丸今日の一粒今日の終りに

ラディッシュ

豊川 安藤 和代

残されし孫も逝きし嫁も悲しけれひとしお思う盆がまた来る

迎え火の炎のやさしその先に父母嫁の顔浮びくる

朝の五時遠なく犬に揚雲雀時どき雀の声の涼しき

台風に曲りまがりたるコスモスの天に向いて花をつけおり

ソフトボールの試合に負けたと泣いてすぐテレビに笑う孫のひなのよ

父よ母よ嫁よそちらも暑いですかコップいっぱいの水を供ふる

「ばあちゃんと遊びたいです」外孫からの便りをそつと手帳にはさむ

広き畑に働く人の姿なく葱苗に陽射しギラギラと照る

孫の蒔きしラディッシュは今朝みづみづとサラダに入り食欲そそる

午後五時に夕焼け小焼けの曲流れ吾が町内は事なく暮るる

## 夏の花

岡崎 林伊佐子

露にぬれ凌霄かづらの朱花が昇りくる陽に煌めきを増す

今日を咲く紅芙蓉の花のもと紋白蝶のつかず離れず

一茎に一花に作りし向日葵のゆらりと高し炎暑のまひる

いつの間に手に乗り移りし小さき蟻軍手の中に入りてさしたり

巻かざりしキャベツを捨てしその葉には蝸牛の白き唾液のこれり

わが行くは吾に聞えず行く先の草をゆらして虫ら隠るる

防犯灯の明りもなくて闇となる古里の盆を夫と過しぬ

老いふたり退屈しのぎに林道の轍のくぼみを埋め立てて行く

隣り家も売却されてこの夏は庭も畑も草茂りをり

いつしかに肥満となりし池の鯉あさの飯粒あらそひて食ふ

## 手術

春日井 清澤 範子

吾が夫の早や退院の日は決る今日新聞に赤きホオズキ市の彩り  
痛みもしびれも治りますよと先生は手術着のまま待つ娘と吾に  
手術する前に何回も医学書を読み介護する吾は薬をのんで  
手術が終り点滴を数本打つ夫の血圧体温吾は書くなり  
手術より五日目にして歩くなり手押し車を押しコルセットをつけ  
武者隠し付く座敷に一人寝て夫は手術の養生をする  
リハビリに杖をつきつつ吾と歩むコルセット着け姿勢正して  
立つか寝るかに過し来りし数日間今日は吾が家の周囲を歩く  
剪定の後に小枝は伸び始む葉は小さく丸く縮れてをりぬ  
吾もまたコルセットを着け菜園の草を抜くなり蟋蟀の声

ブルーベリージャム 島根 金津 文枝

風強く銀杏大木青き実と葉が洞光寺境内に落ち散らばる

観音様を祭る境内の堀にピンク水蓮深々と咲く

嫁万里子さん料理上手良く気の付き庭に実るブルーベリーをジャムに  
次男がパン作り嫁ブルーベリージャムをつけプリンも作り牛乳の朝食

大正の我料理も異なるが栄養を考え今の時代の暮し

午前六時東の空を拝す三ヶ月白く薄すらと見ゆ

戦後の小学校五十五人五クラス生徒多き長男の思ひ出

戦後小学校寄付一円づつ集め学校の為に私の考案採用されし

我一人米子市分析室に広島原爆の音を聞いた

左足膝傷に泥残りをり空襲に逃げ転びモンペの破れ



## 母子草

新城 半田うめ子

母子草玄関前に花咲きぬあせて行く色あいしゅうのあり

夏の野に山百合の咲くせみの啼く声を聞きつつ歩む幸せ

雨蛙数多るなり眺めつつ川辺を歩むさわやかなりぬ

かたばみの赤紫は夕つ陽に輝き見ゆるわが友の庭

父の田の横にて啼く時折りに食用蛙の声を聞きたり

一宮のやさしかりし浅見様時折りにして鰻を貰ひたり

古い人を支へつつ常に働きし古市桂様会へ無く淋し

杖を便り日吉の山の温泉へやさしき友と行き樂しかり

美しき白猫の命終りたり隣の猫は吾になつきし

## 眞夏日

名古屋 近藤 映子

わが夫の倒れて以来正月も夏休みも無くも逢に行く

大相撲最終日なりわが夫にテレビ見せたくて娘と向ふ

我夫は相撲テレビをジット見る私の左手ぐつと握りて

日馬富士優勝したる名古屋場所夫もテレビをジット見ぬ

物言えぬ夫もテレビを見つめ居ぬ大相撲の勝負に目を見開きて

我八階の東南に建つビルは何棟か遠き山々皆隠し

バス降りて夫の病室に向ふ時生垣の奥に百日紅の色

夫見舞ひ会話出来ねど左手の握手の力は我に伝わる

夜明けより蟬の合唱始まりて日中夕迄続くよ続く

リビングのアンスリウムは尚延びて夫に伝へぬ話題の一つ

## 初花

豊橋 伊与田広子

豪雨にて東北北陸水害にわが町には雨降らずして

異常なる暑さに居間に閉ぢこもり一日中を過しをりたり

幼き頃夏の暑さに夕立ありき涼しくなりて楽し思ひ出

実をつけたる蜜柑や柿の木に水遣りぬ日照り続きに落ちぬやうに

わが居間の細き庭には白百合の何時の間にもやら数多の蕾

建物に向ひ花先傷つきて初花一輪小さき白百合

このままに咲かせ置こうか庭のなきガレージの客に分け贈ろふか

雷かみなりらし音のしたりて外見れば雨降り出しぬ待望の雨

これからは庭に置くより庭のなきガレージの客に贈らむ思ふ

心友の骨折したりと人伝にわれは聞きたり人事ならず

## 窓開け放ち

豊橋 胃 甲 節 子

漸くに測溝迄伸びたる草々を汗にまみれつ刈り取りにけり  
人の情優しさ等と過ぎし日の一人ひとりを想ひゐる夜半

諦らめて何も彼も諦らめて今日一日の吾が身を守る

思ひ決めし散歩一度も出来ぬままはや七月も過去となりたり

新らしき事難かしき事知らぬ間に諦らめ病む日の続く空しさ

妹の手術は無事に終りしか吾が身を案じ泣きたり電話に

三十度超す日が続く八月の公園掃除の日の涼しさ有難し

葛の花の甘き匂ひよ見る事も無きまま散歩に出る事も無く

レース編みのモチーフ其のまま黄昏に白き花咲く烏瓜見たし

元氣溢れる蝉の短かき命なり窓開け放ちて蝉の声聴く

## 御在所岳

蒲郡 杉浦恵美子

独り居の我を氣遣ひ稚メダカを届けて呉れし布袋葵付けて  
稚メダカはあまりに小さし目を凝らし探して居れば時間過ぎゆく  
独り居は一日話さぬこともあり餌遣るときにメダカに声掛く  
この家に生きて居るのは十四の小さきいのちと我のみにして  
ともすれば二日も話さぬこともあり電話の一声甲高くなる  
ああこうも人恋しとは我ながら俄な独居に慣れそうもない  
なにとなく夫と共に居る心地して闇に灯れる線香見続く  
二ヶ月も閉ぢ籠り居しこの家を一寸出て見む御霊も帰れば  
夫と来し御在所岳の頂上に独り立ち居り蜻蛉舞ふ中  
山頂に俄雨降る夫居らば我が荷物をば持ちて呉れけむ

慣ならふ

東京 北川 宏 廸

驟雨しゅうう一瞬夾竹桃の花濡らす八月十五日は終戦記念日

この夏の暑さの「熱」とは何なのか見えぬ力に生きもの慣ならふ

メルトダウン・ベント・ベクレル・シーベルト馴染む言葉にストレス溜まる

かまはずに降りそそぎくる放射能蟬・蝶・トンボかまはずに降る

朝方のなでしこジャパンになり切って散歩の道に蹴る石探す

あらためて植物図鑑をとり出だしなでしこの花をたしかめてみる

孫たちがてんでんに描かくスカイツリーに朝焼けの雲夕暮れの雲

採血時はじめて姓名聞かれたりこの病院では一一九番

麻醉解けわが身となりて少しづつ動く手足でのたうちまはる

若ものがリユックを背負ひ携帯見つつ街を行くおや！二宮尊徳



## 御 靈

豊川 堀川 勝子

虫喰ひ跡歪な茄子も畑つもの先祖の御靈に供ふ朝よ

亡き姑の味には足らぬ我が寿司もちひさく置きぬ位牌のま近

戴きし静誠尼の香をくゆらせて先祖施餓鬼の準備整ふ

賜はりし「好文木」の香炷きしめつ師よりの御恩に恥じ居るばかり

腎病みて透析治療の弟の書類作りに一日を励む

古家解体までの逆算は一ヶ月も無し酷暑の夏をおろおろと越ゆ

水道の電気の人らの顔合せ持て成しは我がスイカなりけり

軽トラの車検の代車はピカピカで畑へも行けず持て余しつつ

東京の幼孫二人あづかりて「忙中閑あり」この一週間

建具なき部屋を広びろ駆け回る孫の歓声高くひびきぬ

## チンチロリン

豊川 平松 裕子

やうやくに思ひ出したり件の字を「くだん」と読みて新聞を閉づ  
藪椿の茂みの奥の一葉揺るる雨の滴の落ちしたまゆら

荒々しく声張り上げて出でてゆく夫を背にして雨を見てをり

国坂の霧の峠を越え来しか対向車は明るくヘッドライト点して

取り留めなく思ひは巡る草取りは無心のやうで無心にあらず

水だけを五つの位牌の前に並べ倣ひしままに先祖迎ふる

我が拙き文字にて書かるる姑ははの戒名元禄よりの記録の最後に

ただ一つ覚えし経は般若心経今宵は大きく木魚叩く

隣家より木魚の音澄みて聞こゆ今日は常より早き時刻に

宵の内より真夜となりても一つ場所にチンチロリンは松虫ならむ

## 夏草の

豊川 山口千恵子

川岸の葦なぎ倒し流れゆく濁れる水の今朝の佐奈川

観音寺の大きく枝はる樟あたりわき上がるごとき熊蟬の声

もくもくと緑葉しげる樟の大木目指して田の道をゆく

去年植ゑし無花果はや実の生りぬ丸く大きく赤紫に

知らぬまに孵りて泳ぐメダカの子水甕の中の小さき世界

道端に溜まれるエンジュの花びらの黄色ふはふは踏みつつゆけり

夏草のしげる傾りに高砂百合そこより入りゆく桔梗山墓地

身近かには祖父祖母と父と母夏の日つよし桔梗山墓地

病室に母と声上げうたひたりきいちばんはじめはいちのみやには☒☒

どぜう鍋ケイタイに撮りて食べ始む桃子ときたり浅草の街

## 千尋

豊川 小野可南子

朝焼けの空にひろがる鴝色とぎはたちまちにして淡墨の色

雨の音今一度の睡りをとこのままこのまままたゆたふがごと

雨音はまだまだつづく此の朝はゆるりゆっくり髪を梳きつつ

久々の雨に潤ふ今日の日よ孫と対ひてジグソーパズル

日本地図のジグソーパズルを嵌めてゆく孫に負けしを良しとはしない

頬すぐる風は秋風雨のあと小さき庭草引くもやさしく

久々の雨に潤ふ畑つものことごと勢ふ今日の緑よ

心して背を伸ばしぬ朝の道に影はしつかと我の型を

孫千尋すかさすわが肩支えくるる明るきベガを仰ぐ危ふく

菩提樹の色づく粒ら実我が指にフルルフルル揺るる楽しさ

## 再々の子規庵

豊川 夏目勝弘

ゆつたりと下がる糸瓜の緑陰ぞ今日の子規庵静かなりけり

夏草に狭まる庭道塞ぐがに水引のヒゲ伸びてゐにけり

庭木々の狭間に街の看板が何商ふかわからぬ屋号

丈高く一本残る桔梗きぢょうの深紫のおとろへ目立つ

終焉の子規の向ひし黒机小さきケイトウ小さき花ビンに

糸瓜いとわりのお暗き棚より落つ露庭石にて光り飛び散る

劇痛にて叫ぶ子規のその声がここ六畳間に空想のひびき

子規用と机の一部を切り取りし黒き文机にて我も文字かく

ガラス越しに庭見し子規の喜びは今の我の何に当るや

子規そして鼠骨も逝きし六畳間今は我の一人のみの部屋

## 大柳

「招待」 秋山逸穂

家壁をおおいつくせし蔦青く窓の硝子のかがやき隠す  
大柳かかえきれざる太さにて小山のように枝たらしおり  
切り株に腰をおろせば川風に次第に汗はひいてゆくなり  
視界には数えきれない星のあり街のがるればよきことひとつ  
しばみゆく朝顔ながむるベランダに角度鋭く昼の陽の射す

## 猛暑日

大阪 伊藤忠男

陽炎に揺れる街路樹葉影よりけたたましくも蝉の鳴き声  
つかの間の秋風吹いてひと息し戻りの夏にからだこたえる  
荒れた手を両手につつま感謝するいつもすまぬと和歌に詠まん

## 赭船

豊川 白井信昭

朝夕の土手巡りにして養魚場ゆたけき水音清しき水音  
マリーナの沖合にヨット群がるる三河の海の古くは赭船  
手入れせぬ横着者の花壇にはグラジオラスの朱が直ぐ立つ



『いっしょに』

(西浦公民館 いーはとぶ)

しろじろと今宵の窓に月の影離れ住む息子よけふ誕生日か

鈴木美耶子

嫁三代暮しし日々も遠くなりいま嫁迎へ姑となりたり

吉見幸子

静かにも涼しき所にゆきたるか青大将の姿も消えたり

牧原正枝

夏空の雲の形はだんだんと変はりつつありまた流れつつ

岩瀬信子

宵祭のチャラボコの音も静まりて皓皓と光る十六夜の月

三田美奈子

台風にも倒れずにしてゴーヤの棚はやも青々の大き実三つ

稲吉友江

現代学生百人一首 東洋大学

秒速で眠りにおちる幼子に愛しさ覚えた保育体験

都立片倉高等学校三年 石黒優希

会うたびにこぼれる笑顔むけられて細く小さなしわの手にぎる

習志野高等学校三年 早川美喜子

大切な思い出だからコーヒーと一緒に混ぜて飲み干したのです

捜真女学校高等部二年 伊藤綾乃

先生の上に落ちたらどうしよう汗がボタボタあん摩の補習

愛知県立青学校一年 内田義隆

「俳句」

大西瓜チャイルドシートに居座れり

植村公女

水打って小さき虹の中に入る

振り向けば母いる安堵盆の月

億年の進化の果てや蝉の鳴く

一石

蟻の道飴玉一つ誰ぞ置く

野分とは季節を分ける嵐とや

謙信の城のふもとや風涼し

喜仙

蝉時雨潮風受くる春日山

秋草や一茶の終の土の蔵

微笑みて息する母の残暑かな

皓一

エアコンに暑さしのぎて老ゆるかな

故郷や今も変らぬ油蝉

## 私の一首

身を縮め屋外の足湯に浸りたりほつほつ温きが体をのぼる

内藤 志 げ

何も彼も忘れたい思いに下部に行きたい。夫の旅行に合せ、隣の畑の友人を誘うと心良く受け入れてくれる。

下部の温泉は湯が柔かい感じがして食事のもてなしも良く私の好きな宿。

翌日は雨がほそほそと軒下に足湯とある「寒そうね。どうしよう」少しだけと広い足湯に二人だけ。気持ちよく暖かさが体を伝うほつほつの表現出来たのが良かったかと思えます。友人に良い旅をありがと。

榎の木の赤き芽をつみどうだいの若芽も摘みて天ぷら旨き

林 伊 佐 子

「とっくだい」を「どうだい」と聞き間違えて詠みご迷惑をおかけしました。とっだいの木は、昔電気のない時代、細く柔かいこともあって、火を灯すとき芯に使われたことを主人に教わり、感動しました。たかも、とっだいの若芽は柔らかく癖のない旬の味です。春先の青い野菜不足を補った昔の人の知恵だと思えます。飽食の世になって、孫たちは食べべないのです。山里に育った私は、山菜が好きで自然の賜ものを有り難いと思っています。

新しき二つの白きマグカップ湯気白しろのミルク注ぎ分く

山口 千 恵 子

新調した二つの白いマグカップに、温めて湯気立つミルクを注ぎ分けた。

他愛もない、面白みのない歌ですが、この朝もふっと、震災にあわれた東日本の人々のことが思い出されました。

いつもと変わらぬ日常を送っている今の幸せを思う時、少し申し訳ないような気になりました。そんな時にうかんだ一首です。

贈呈誌 八月号

「青森アララギ」

枯れ原をよぎりて牛群ゆくあたり斜光しばらくありて明るし

阿部 勝美

笹谷 正一

春日さし明るき街の散歩道今朝は何れの角をまがらむ

「秋楡」

高木 啓子

桜葉に小さき毛虫の食欲が数多集まり「生きる」をみたり

坪根 恭子

指先に残りいる刺疼きおりいつか忘れし痛みの数多

「愛媛アララギ」

三浦 稔子

夕つばめ巢に戻り来て鳴き交す声を聞きつつ大葉を数ふ

西村 チズ子

川に添ふ柳並木が風に揺るるわれもしばらく吹かれてをるか

「鹿児島アララギ」

森枝 むつ美

網戸より入り来る風の快く節電の夏を一人思ひぬ

山本 和男

野仏のやさしき眉は霧に濡れ代掻く一人遠くかすめる

「高知アララギ」

西森 英子

放たれて山羊は草食む急斜面啼く声優し山に響きて

益房 子

花の香をたのしむ年はすでにすぎ色や形に心ときめく

「滋賀アララギ」

安藤 美智子

化粧せし母を見ることの終ぞ無し今朝は思ひぬ紅ひきながら

小崎 ユキ

ひねもすを四方の山々に飴して鳴き渡り行くホトトギスの声

「冬雷」

田中 しげ子

何気なく置きたる物を探し廻る額の汗を拭ひもやらす

野崎 礼子

行き違いほんの些細なことなれど心に響く夜の雨音

「椋」

山口 邦子

うす紅の花を咲かせし捨て大根晩春の日の風にそよげり

藤記 光子

緑なす麦の穂の上風わたり電柱の影モザイク模様なす

「榎の木」

高山 康子

みかんの花去年よりも白く咲き満てり成り年なりや豊作を待つ

「群山」

前田 敏行

午睡より目覚めし余震の続く部屋月の明かりに靴下をはく

伊藤 太一郎

南向く二階の窓より青みゆくスズカケの見ゆ梢揺れつつ

「穂の原」

松井 花子

木もれ陽の若葉のゆるる近衛の庵娘と孫と抹茶いだたく

荒川 榮子

祭り前夫の留守は久し振り電車の音の聞こえるなり

## 絹の話 (10)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

### 現代日本人と絹

日本では絹の生産は有史以前からで、大化の改新の時から租庸調の中に絹を納めさせる項目があり、広く各地で生産される様になっていました。棉の歴史は500年、化学繊維の歴史は50年に比べれば遙けき歴史を持っています。絹は庶民が作り、いつも支配階級に重用されて来たので絹に聞けば日本の歴史が読み解けるほどです。

ですから、絹の事は皆良く知っているとと思うのが普通の認識で、殆どの人がそう信じています。しかも日本の絹が世界で最も上質とも思っています。

しかし老若男女を問わずあまり理解していません。

東京の某デパートで家蚕や野蚕の繭を見せながら絹の説明をしていた時、20代前半の3人の女性が繭を手にとって耳元で振って、カタカタする音は何だと云うので、その中には乾燥した蛹が入っていると云うと、蛹とは何かと云うから、これこれしかじかのものだと云うやいなや「ウソー！」「キヤー！」と大声を上げていちもくさんに走り去りました。

横浜の某デパートで絹の話が終わって2人の質問者が残っていて、70代前半の女性が、自宅の敷地に桑の木が有り、嫁に来て50年近くなるが、未だ一度も繭がならないがどうゆう訳か？ 2人目の50代後半の女性は「さっきから聞いておればいい加減なことばかり言っているとんでもない、絹は虫が吐く糸で、繭から糸をひくなどと嘘も休み休みな言え！」と抗議するのです。ご兩人とも和服は沢山持っていて、未だ仕立てない物も有ると云うのです。

またある時、仕立の洋服を自宅に届けて欲しいと云う依頼でお伺いすると、二竿の箆筒に反物がぎっしり、どうしたのですかと尋ねると、「戦後働かずに働いて来て、家も建て人かど以上の暮らしになった、まだ仕事をしている、もう袖を通す時間もない、

自分が死んだ時、呉服の一枚も無かった言われたくないので、まだ買い続ける。」と云うのです。これが現代の絹を代表している姿なのかと思うことしきりでした。

そうです、日本の一般の人が我を争って呉服を買いあさったのは昭和30年代でした。朝鮮戦争特需を受けて戦後復興が急速に進み家計に余裕が産まれて来た頃です。失ってしまった女性の心のよりどころでしょうか、呉服が国家予算に並ぶ程、売れに売れたのです。今日では呉服はデパートの一角に

こじんまりとしています。売れなくなつたのではなく、昔に戻つたと思えば良いのです。これからは好きな人に伝統的技術をしつかりふまえた品を作る好機です。

昨今立派な反物が整理屋等に二束三文であちこちの旧家から引き取られて行きます。良い物は一部海外の美術館やコレクターに渡っています。インドやインドネシアなどでは、古い織り物は既に市井にはありません。日本でも今後10〜15年でかなりの物が（浮世絵がそうであった様に）散逸してしまふでしょう。

結局日本の多くの人が絹を手に入れたが、急速に進んだ社会構造の変化により、夫婦ともに働き、家は狭く呉服の出番に限られた物になつて来ました。

日本の絹の長い歴史の中で大衆にまで絹が行き渡つた最初にして最後かも知れません。

そこで、ここ3年各地のデパート等のシルク販売会や、講演会で、自分が直接接客する機会に色々な質問をやり取りしながら大雑把なデータを作ってみました。

シルクを買わない、好きでない — 20% —  
理由 高い、めんどくさそう  
シルクは好き、買ってみたい — 80% —

— 良いものが有つたら買う — 15% (80%の内)  
— 願望有るが買わない — 85% (80%の内)  
理由 — 洗濯等管理が分からない — 80%

絹を買いたいと思つている人の80%が洗濯表示のドライマークに躊躇している。洗濯屋に出したら横変した等嫌な思ひがあるし、自分で手洗ひした事も有るがバリバリになつてしまつたなど失敗があるので。

実はスチームアイロンすれば元にもどり、しなやかになるのだが、今日まで絹業会は絹のアフターケアをしつかり顧客に伝える事をおろそかにして、洗濯屋に投げて来た事が売れない最大の原因だと気付いていない。

蚕糸業法が平成10年に廃止なつて、繭が糸以外の利用が可能になり、化粧品、食品添加、工業資材、医薬品等絹の機能性利用は目ざましい物が有る様に、洗濯表示のドライマークを廃止する事で3千億円〜1兆円の需要が産まれて来るでしょう。

そうなれば、絹が健康と環境に寄与し本来の省エネが実現して来ます。

## 物理学者と詩歌の世界 (21)

一 石

### — R・ファインマン再訪

R・ファインマンについてはすでに「物理学者と詩歌の世界(11)」で紹介した(参考資料1)。最近、たまたま彼の詩を『ファインマンさんベストエッセイ』(参考資料2)の中に見つけたので、今回は「ファインマン再訪」の形をとってその詩をご紹介します。詩は「科学の価値とは何か」の章の、「疑いをもつ自由こそ科学の最高の価値だ」の項目にある。現代物理学を牽引してきたファインマンが詩に託して表現した新しい世界観とはどんなものであったであろうか。この書から彼の言葉を数行分、引用しよう。

「僕たちは科学のおかげで、古来の詩人や夢想家たちが想像すらできなかつたほど、もつとすばらしい変化に富んだものごとを想像することができるようになったのです。これから見ると自然の「想像力」というものは、人間の想像力などとは比べものにならないほど遠大なものだということがわかるでしょう。だいいち世界はゾウの背に乗って運ばれており、そのゾウは底なしの海の中を泳ぐカメに乗っているのだなどという昔の世界観に比べると、グルグル回転しながら何千万年ものあいだ宇宙のなかをめぐり動いている球

の上にも、不思議な力によって僕ら一同が、その半数は逆さまになって引きつけられているのだ、とうことのほうが、どれだけ雄大ですばらしいか知れないではありませんか。(以下略)

詩は「たとえば、ひとりで浜辺に立つと、僕の心にはさまざまなことが浮かんできます。」の書き出しで始まる。

波が打ち寄せてくる

膨大な数の分子が

互いに何億万と離れて

勝手に存在しているというのに

それが一斉に白く泡立つ波をつくる

それを眺める眼すら

存在しなかつたはるかな昔から

何億年もの年を重ね

いまも変わりなく

波濤は岸を打ちつつける

ひとかれらの生命もない

惑星の上でだれのため、何のために

波は寄せていたのか？

ひとときも憩わず

エネルギーにさいなまれ



太陽に滅ぼし尽くされ  
宇宙に放たれる  
その小さなひとかけらが  
海を轟かす

海底深く

分子はすべて

互いのパターンをくり返す

新しく複雑なものが生まれるまで

こうして生まれたものはまた

自らとそっくり同じものを

作っていく

そしてまた新しいダンスがはじまるのだ

その大きさ複雑さを増しながら

生命あるもの、すなわち

原子のかたまり

DNA、タンパク質は

たぐいなく

複雑なパターンを

踊りつづける

そのゆりかごを離れ

こうしていま

乾いた地上にたたずむ僕は

意識ある原子

好奇の目をもった物質だ

思惟することの驚異に打たれ

僕は海辺に立ちつくす

その僕は

原子の宇宙

宇宙のなかの原子

この詩の前に、ファインマンはハワイで仏教の寺を見学したときの印象深い話を語っている。そこで住職から謙譲ということについてある教訓を得た。

人はみな極楽の門を開く鍵を与えられているが、その同じ鍵は地獄の門を開く。

彼は、文明の将来に対する科学者の責任を説いてやまなかった。FUKUSHIMAにおける科学の役割を考えると、この言葉はきわめて示唆に富むといえる。

#### 参考資料

- 1) R・P・ファインマン、『ファインマンさんベストエッセイ』(大貫昌子訳) 岩波書店
- 2) 三河アララギ、P 36、第57巻、第12号(2010)

# 斎藤茂吉と御津磯夫 一

「月虹」 鮫島 満

御津磯夫はアララギ同人で、斎藤茂吉、土屋文明に師事した。本名今泉忠男。昭和二十九年には「三河アララギ」を創刊、主宰した。歌集に『ノボタンの窓』『陀兜囉の花』『黄素馨の門』『アカンサスの径』『わが冬葵』『零凌香』他がある。

## 一 夜の虹をめぐって

斎藤茂吉がアララギの門弟今泉忠男に宛てた書簡が全集に収録されている。

拝啓、○夜の虹は小生大正十四年以来毎年箱根にまゐり候ゆゑ、いつも経験いたし居り候、今年は山口、佐藤の二君来りし時もたまたま夜の虹見候につき、相談して作らうといったし作り申候、月東にある時は西に、月傾く時には東のかはの峡の雲に立ち申候、○大兄の御歌も写生にてなかなかおもしろく、「昏き山の上の虹」など写生確かに御座候

(昭和十二年十月二十一日付)

がその一つである。これによると今泉忠男が茂吉に夜の虹の

制作事情のようなことを尋ね、それに茂吉が右のように答えたものと思われる。今泉が取り上げた歌がどれであるかは書かれていないが、この昭和十二年に発表された箱根別荘滞在の作で、次に示す三首目であろうと思われる。

月読はさやけきなべに雲ごもる峡のひくきに虹立ちわたる

昭和十二年「箱根にて」(『寒雲』)

山の雲うごきながらに月てりてあが心いたし夜の虹はや

同

中空に月はかがやき西の峡ただよふ雲に虹おほおほし

「箱根小吟」(同)

夜の虹はすなわち月虹のことであるから月の光によつて見える。右の三首目は「西の峡」に霞んでいる月虹を詠んでおり、先の手紙の「月東にある時は西に、月傾く時には東のかはの峡の雲に立ち」の前半に一致すると言えよう。なお、この手紙に「大兄の御歌も写生にてなかなかおもしろく、『昏き山の上の虹』など写生確かに御座候」とある今泉の歌の完全な形が(私の見落としてなければ)歌集の中にないので不明である。今泉の第一歌集『陀兜囉の花』には、

夜の虹しばらく見むと佇ちしとき野路ほそくして人に逢ひにき

(昭和二十三年)

という秀逸があり、また初めに示した茂吉からの手紙のことを回想した、

夜の虹のおぼろに白きはかなさを強羅よりわれに教へたまひき

(昭和二十八年)

がある。月虹の歌には、「夜の虹を仰ぎし空をゆびさして小さき峡の冬のひるまへ」(昭和四十一年『黄素馨の門』)がある。

## 二 万葉歌をめぐって

この翌年にやはり茂吉が今泉宛てた手紙がある。

拜啓益々御清適大賀奉り候 今般堀内氏を御案内たまはりしよし大にありがたく御礼申上候、○今年は旧七月に閏が有之候につき、来々年あたり(閏のある年の前年)に御調査たまはりたく、御願 申上げ候、そのころ小生都合よければ御地迄参上いたしたしとも存じ居り候、○右御礼迄、奥様も御同道下されしよし、よろしく御伝言願上候 頓首

(昭和十三年十一月十五日付)

ここに「調査」とあるのは『万葉集』歌

引馬野ひくまのにほふ榛原はりはらいり乱り衣にほはせ旅のしるしに

(卷一・五十七)

の考証のための調査である。「堀内氏を御案内たまはり」は、堀内(通孝)がアララギの師である茂吉からの後に示す手紙による依頼を受けて三河の今泉を訪ねたことをいう。また、「今年こゝねは旧七月に閏が有之候につき、来々年あたり(閏のある年の前年)に御調査たまはりたく」は、右の万葉歌が作られた日に近い時期に調査したいということであろう。

さて、調査の内容はというと、茂吉が名古屋に暮らす堀内に書いた書簡によってわかる。

御地では、萩の花の状態いかがに候や、寺の境内などに植ゑられてゐるもの、植物園等、個人の庭等につき、すでに過ぎたるか、温いところにはまだ残つてゐるか、そのへん、秘かに御調べ願上候○「本月末か」十一月十六日ごろの日曜を利用し、三河の宝飯郡、御津町あたりの状態、御しらべの上、御報告にあづかりたく御願申上候。

# 和歌から派生した季語の本意（その十五）

「笹」 佐藤喜仙

## 42 冷まじ

「年暮れてわがよ更けゆく風の音に心の内のすさまじきかな」

紫式部（玉葉集）

「跡たえてうづまぬ霜ぞすさまじき芝生が上の野への薄雪」

冷泉院（風雅集）

以上の二首は冬の歌であるが、俳諧では晩秋の季とされた。「冷まじ」には荒涼、凄然とした自然の荒れすさぶ様をいう場合と、式部の歌に見られるような心理的冷たさ、心細さといった両面の意がある。

### 例句

冷まじや吹出づる風も一の谷

才麿

山畑に月すさまじくなりにけり

石鼎

冷まじき青一天に明けにけり

五千石

## 43 雁（がん・かりがね・雁の棹・雁渡る）

「秋の田の穂田を雁が音聞けくに夜のほごろにも鳴き渡るかも」

聖武天皇（万葉集）

「秋風にはつかりがねぞきこゆなるたが玉づさをかけてきつらん」

紀友則（古今集）

雁は鴨と同様秋に日本に渡って来て、越冬する大型の鳥で

ある。既に万葉の時代より歌われ、延々と現在に至っている。特に雁の鳴き声は遠くまでよく響き、それが日本人の気質にうったえるのか、鳴声を愛で歌に詠み、俳句に詠まれてきたのである。

### 例句

病雁の夜寒に落て旅ね哉

芭蕉

今生と思へぬ声に雁渡る

林火

雁ゆきてまた夕空をしたたらす

湘子

## 44 蘆刈（蘆刈女・蘆刈船）

「蘆刈りに堀江漕ぐなる楫の者は大宮人の皆聞くまでに」

大原今城（万葉集）

「玉江漕ぐ蘆刈小舟さし分けてたれをたれとか我はさだめん」

詠人知らず（後選集）

古代、中世において蘆は貴重な材でありそれで屋根を葺いたり、葭簀を作った。特に京の都から近い難波の浦（淀川の下流）は蘆の産地で、秋になり蘆が枯れると、小舟で蘆刈をする光景が見られたのである。

### 例句

また一人遠くの芦を刈りはじむ

素十

津の国の減りゆく蘆を刈りにけり

夜半

蘆刈の置きのこしたる遠嶺かな

鶏二

## 「氷魚」のことから (129) 岡本八千代

原発のセシウム汚染の不安のつづく日々。サッカーの第6回女子ワールドカップドイツ大会で、日本代表の「なでしこジャパン」が優勝した。私でさえ、興奮した日々でもあった。

そして、第93回全国高校野球選手権大会も8月20日に了った。選抜49校の甲子園での熱戦を今年もテレビで観ることができた。どうしたものか、汗みどろになって活躍する選手たち、応援する男子、女子の高校生たちを観るとき、涙が出てくる。その時、そのことに無我夢中になる少年たちの純粹さ。実に美しい。

さあ、ここからは子規の「一日物語」の木田君の話から始めよう。(1277回のおつき)

二。

木田君「余は二歳の時から仙台の玉屋という呉服屋の内で養われて小僧より仕あげて後には番頭になり」以下略す。

○間もなく世帯を分けてもらって小さい出店を開き「小玉屋」という屋号をもらって、一家の主人となった。

○おかのという女房をもらって、小僧には旦那といわれ、女房には良人良人といわれていた。

○しかし、自分は常にかかるとのことがあった。——それは、自分の生みの親のことだった。どこの誰という人や

らわからなかった。玉屋の主人に聞いても教えてくれなかった。

○二歳の頃、自分は捨子であったのを玉屋の主人が拾ってきたという噂が立ってはとみんなに軽蔑されてはかわいそうというお心らしいと思つて、人知らず涙に咽ぶこともあった。

○結婚してから、一ヶ月許りすぎて、玉屋の用事で、羽後の横手まで行く事になった。

○女房に其の話をしたら、女房はかいがいしく旅の仕度を調べてくれ、翌日の一番汽車に乗り込むことに定まり、その夜は枕についた。

○翌朝、女房のおかのに起こされた。おかのとは結婚してわずか一ヶ月ばかりであったが、五年も十年も経っているように仲良かった。

○玉屋の主人には自分をこんなに倅わせにして下さったと感謝していた。しかし、自分のほんとうの親に一度逢いたいと願ひは常にもつていた。その矢先に、この度のお使い。——妻と話しているうちに、トントンと表の戸を叩く音がする。——。

(小日本 明治27年3月24日)  
以上二。のあらずじをまとめてみた。さて、次回は、どんな展開になるのか？子規さんは、なかなかミステリアスにさそつてくれるよう。

ことのはスケッチ (394) 今泉 由利

『ニューヨーク』

二階建の、太陽にもろにさらされる私の書齋、とてもとても暑い。

一日中留守にする生活だったから過せたけれど、基本的に家に居る生活になったこのごろ、この暑さにはぐったりしているばかり。

一つ二つのエアコンをつけても何事も無い、家中のを全部つけて一人で居るといふことは、節電の心に反する。

「そうだ、口減らしにニューヨークへ居候しにゆこう」日本国には、極限のゼロ近い節電、節水が出来るわけだから、やっと役にたてることになる。

心軽くニューヨークに着いた。子供達はそれぞれ仕事に出掛けており、一人家にいて、*「さて、何をしようかな」*と思う時、電気スタンドがユラユラした。*「たいしたことない」*、*「あ、大変、ニューヨークには地震は起きないはず」*、耐震建築はなされてはいないはず、*「摩天楼のど真中にいるのだ」*

テレビをつけると、どの局も、地震騒動をしている。人々は、マーケットに走り、水だ！食料品だ！立ち話した！

ニューヨーク地域で、M5以上の地震は、一八八四年以来発生していないとう。

一万七千年前、氷河が溶けはじめ、ハドソン川を滑り落ち、

マンハッタンも氷に洗われ陸が姿を現した。今ではセントラルパークで、氷河にけずられた岩盤が沢山露出してみられる。マンハッタン島は、二つの片岩が一つになった一枚岩の島。地震は起らない、ということになっている。各家庭に、水と食料品が増え、大興奮は治まった。そして今度は、過去五十年で一番大きいハリケーンがやってくるという。

ニューヨーク歴史上初の避難勧告及び地下鉄、バスをはじめとする公共交通機関のストップ。NYの地下鉄は、ほぼ二日間運行休止された。空港も閉鎖されてしまった。

ニューヨークのど真中、総ガラス張りの家の中から、ガラスが割れたらどうしよう、と、外の様子を見張っていたのだけれど、雨の時に少し降り、街路樹は「そよ」ともそよがない。

「閉じ込め」を避けるため、とても高く高いビルのエレベーターも止まってしまっていた。自動車も通らない。

みんなストップしてしまった、静かな静かな不思議なニューヨーク。

どこの家庭にも、懐中電気やローソク、もっと水、もっと食料が増え、*「アイリッシュ」*は去っていったのでした。

子供達と、国を隔てて遠く住み居るういえば、災害にあっている子供達を安じ、狂っていたことが何度もある。今回は、一緒に居られたから本当によかった。アルゼンチンで生れた私の赤ちゃんを、守ってあげなくては、守ってあげなくては、と抱き締めた日を思い出す。

## 和菓子街道 (60)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

文政(1818～1829)の頃のこと。嶋紬の反物売りをやめて江戸に団子作りの修業に出た小四郎という男が、郷里の四日市で団子屋を始めた。江戸仕込みの団子はすぐに評判になった。

その後、代を経て大正時代になると、店に出入りをしていて豊とよという男が、嶋小の団子を四日市周辺で売り歩いてくれるようになった。団子の味もさることながら、「団子豊」の愛称で知られたこの男の口上がまたうまかった。それで「嶋小の団子」は、街道はもとより四日市一円の名物になったのだ。

香ばしい匂いに誘われて店に入った。奥からはもくもくと白い煙。火事かと思ったがそれがこの店の常らしい。順番待ちをしていた東京在住というお客のひとは、嶋小の団子は帰省の楽しみのひとつ



だといっていた。弾力があり、キリッとした醤油の辛みが米のうま味を引き立てている。確かに忘れ難い味だ。

回転の遅い石臼で丁寧に米をひいて米粉を作るため、風味が落ちない。

◆嶋小餅店

住所:三重県四日市市22-2

電話:0593-31-5769

## お知らせ

▽十一月号原稿は、十月一日(土)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考慮あわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は、毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

## 「ワイルドシルクフェスタ」

豊橋丸栄 6階

10/27(木) 11/2(水)

公演 今泉雅勝

10階特別室 PM1時

10/29「絹・未資源資源の利活用」

10/30「絹と健康」

## 編集後記

▽「暑さ寒さも彼岸まで」と昔から言われてきましたが、十月号が皆さんのお手許に届くのは、丁度そのお彼岸の頃だと思えます。

この夏の暑さもようやく峠を越した感じがします。酷暑の続いた日々、原発事故による電力不足を補うための、節電が叫ばれた夏の日々でした。法師蟬の鳴き声も、<sup>はげ</sup>烈しかった季節の終わりを告げているようで、もの悲しい思いがわいてきます。

歌をつくる気持ちもそがれるような暑さもすぎてゆきます。毎日の暮らしの中で、生きる喜びを感じるような歌を詠むことができたならと常に思いつつ、東日本の震災からのできるだけ早い復興を願いつつ、三河アラギをより充実したものにするため、会員みんなで努力してゆきたいものです。

(山口)

## 三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。  
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができます。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一カ年分二万円の前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができます。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成十三年九月二十五日印刷 第五十八巻 第十号

平成二十三年十月一日発行 定価 六百元

### 編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘

### 発行人

平松 裕子・山口 千恵子

### 発行所

今泉 由利

三河アララギ会

三河アララギ発行所 千四四一〇三二一

豊川市 御津町 御馬 西 三三七

T E L (〇五三三)七五二〇〇九

振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九

U R L E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp

Homepage <http://maizumityuri.jp/>

### 印刷所

株式会社 桜 創美